

学習指導と共に学級づくりを重視し、学習環境を整える

青森県 青森市立沖館中学校

沖館中学校では、基礎・基本の充実を指導の中心に据え、毎日の掃除終了後のST（スタディタイム）やチーム・ティーチングなどで生徒の学力差に対応している。生徒指導と学習指導をリンクさせた学級づくり、生徒と教員の信頼感の醸成があらゆる指導の土台となり、全国平均を大きく上回る学力を実現している。

◎ 取り組みのねらい

**多様な学力層にあっても
生徒の進路希望をかなえたい**

北に青森湾を望み、フェリーターミナルや商店街などが集まる青森駅。そこから車で10分の住宅街に沖館中学校がある。保護者は会社員や公務員が多く、大学進学まで視野に入れている家庭は多いが、都市部ほど塾があるわけでもない。また、経済的に恵まれない家庭も3割程あり、人の話が聴けない、板書を正確に写せない、忘れ物が多く、教科書さえ忘れるという生徒も多かった。家庭環境が多

様で、学力層も幅広い生徒たちの進路希望をかなえるために、同校では基礎・基本の定着に重点を置き、学力上位層から下位層までを視野に入れた手厚い指導を実践している。

生徒のあいさつや身だしなみは素晴らしく、笑顔で学校生活を送っているが、5、6年程前には、深刻な荒れに直面したことがあった。2008年度に赴任した音楽科の小野優子先生は当時を次のように振り返る。

「私が赴任した年は、教員への暴言、授業妨害などもあり、授業が成立しないことも多くある状況でした。ただ、その年の1年生だけは落ち着いていたので、先生方は『この学

School Data

◎ 1947（昭和22）年に開校。教育目標は「自ら学び心豊かにたくましく生きる生徒」の育成。全校いじめ防止集会や学期1回の道徳強調デー、生徒リーダー育成など、生徒の自主性・主体性を伸ばす生徒指導を重視している。



校長◎ 櫻庭寿一先生

生徒数◎ 565人 学級数◎ 18学級（うち特別支援学級1）

所在地◎ 〒038-0002 青森県青森市沖館 5-19-1

TEL◎ 017-781-0855

URL◎ <http://www.aomoricity.ed.jp/okidatechu/>

公開研究会◎ 未定

年から学校を変えていこう」と決意をし、学校の立て直しに取り組みました」

生徒指導の徹底を始め、教員への信頼感の醸成、基礎・基本の定着を図ったところ、1年程で学校は落ち着きを取り戻した。以来、生徒指導を基盤にした学習指導、教員が生徒に寄り添う指導、「耳と目と心で聴く」態度の育成が、同校の教育活動の基調となっている。

◎ 学力層に応じた学習指導①

**毎日の掃除終了後のSTで
学力中・下位層を下支え**

基礎・基本の定着を重視する同校の取り組み

広がる学力格差への多様な取り組み

みの中で、主に中・下位層の学力の下支えに効果を上げている取り組みが、毎日、下校前に行う**ST（スタディタイム）**だ。掃除終了後、帰りの会が始まるまでの10分間、自学自習に取り組む。

内容は、学年・学級の裁量に任されているが、市販の教材を基に作成した基礎・基本のプリントが中心だ。英語科の太田巧先生のように、覚えてほしい20語程の単語リストを配り、10分間で書いて覚えさせることもある。3年生になると、高校受験を意識して、基礎的な入試問題に取り組みさせる。早めに終わつた生徒は、宿題や発展問題に取り組んでもよい。教務主任の野口七重先生は、そのねらいを次のように説明する。

「家庭環境が多様なので、とにかく10分間は落ち着いて自学自習をさせ、机に向かう習慣を身に付けさせることが最大のねらいです。少しでも問題が解けるようになれば、もう少し続けてみよう」と、家庭でも自ら学習に向かえるようになると期待しています」

定期考査前の3日間は、「**学習強調期間**」として、STの時間を30分間に延長する。定期考査に向けての学習時間を共通で確保し、家庭でもテスト対策に意識を向けさせるねらいがある。学習内容は、生徒が自分で教材を用意したり、教員が用意したプリントに2教科各15分で取り組んだり、学年・学級によってさまざま。教員が用意したプリントから定

期考査で類似問題を出して達成感を味わわせ、次のSTに向けたモチベーションを高めることもある。

● 学力層に応じた学習指導②

TTや発展的なプリントで 学力上位層にも対応

学力格差への対応として習熟度別授業を行う学校も多いが、同校では、学び合い活動を重視していることもあり、数学と英語の授業で**TT（チーム・ティーチング）**を採用される。問題演習で手が止まっている生徒に個別指導をしたり、授業に集中できていない生徒に注意を促したりするほか、早めに問題演習が終わった生徒に発展問題を解くよう指示



写真 授業では扱えない発展的な問題を中心にプリントを作成。学習塾に通っている生徒が少ないこともあり、発展的な教材に対する生徒の意欲は高い



青森市立沖館中学校 校長
櫻庭寿一 さくらば・じゅいち
「教員がリソースであり、声を掛け続けることで、生徒が変わる」



青森市立沖館中学校
野口七重 のぐち・ななえ
教務主任。数学科担当。「笑顔を大切に、ありがとう、ごめんなさい」を素直に言える生徒を育てたい」



青森市立沖館中学校
太田巧 おおた・たくみ
特別活動指導部。英語科担当。「生徒の自主性の尊重と、教員主導の各場面を明確にし、生きる力を育てたい」



青森市立沖館中学校
小野優子 おの・ゆうこ
特別活動指導部。音楽科担当。「合唱を通して仲間を大事にする生徒を育てたい」

するなど、上位層が「浮きこぼれ」をしないようにすることもTTの役目だ。なお、初任教員をベテラン教員の授業にTTとして入れ、その指導ノウハウを間近で見、授業力向上に結び付けることも行っている。

授業以外でも、主に上位層向けには、国数英理社の5教科で「**発展プリント**」を活用する。教科担当が作成した問題演習プリントを廊下に置いておき、生徒は各自で持ち帰って取り組む（写真）。答え合わせは生徒自身で行い、教員は質問を受け付ける。各教科とも数十枚をコピーして用意しているが、テスト

前には全てなくなることと少なくない。生徒が自ら学ぼうとする意欲の表れだろう。

●小中連携による学力向上策

9年間を見通した指導で 小学校段階から学力の底上げを図る

同校では青森市教育委員会の指定を受けた10年度から、校区の2つの小学校と連携事業を推進している。生徒の学力格差は小学校段階で既に始まっており、その手当てとして、小学校と連携して課題を共有し、望ましい継続のあり方を研究している。

強く意識しているのは、学習規律や生活習慣の連続性だ。11年度には中学校での学習や生活の基本を定めた「**学習の約束**」の小学校版を、12年度には中学校での話し合い活動の進め方やルールを定めた「**沖中モデル**」の小学校版を作成し、小学校の教室に掲示した。更に、小学校から培われてきた自分の課題に取り組み「**一人勉強ノート**」を中学校でも引き継ぎ、自学自習の習慣の定着を促す。

小学校の主導により、小中のつなぎ教材「**春休みの生活と学習**」も作成した。国語と算数の既習事項を確認する学校自作の問題集で、春休み中の生活記録、保護者のコメント欄も設けた。生徒は中学校入学前の春休みに取り組み、中学校に提出する。

「中学校入学までの春休みを有意義に過ごしてほしい」という小学校の先生方の願いで作

成しました。解答の仕方や生活記録の書き方などから、理解度や学習姿勢を把握できるので、入学後の指導にも生かしています」（太田先生）

このように、学力格差が始まる小学校段階から学習態度や学習規律を系統的に育成し、小中接続の時期にもその連続性が途切れないように指導を工夫することで、生徒により良い学習習慣、生活習慣が定着している。

●生徒指導と学習指導のリンク

学習意欲の土台となる 生徒間、教員との人間関係を構築

同校は学習指導の充実だけで学力が向上するとは考えていない。櫻庭寿一校長は次のように指摘する。

「学力向上に何より必要なのは生徒の意欲であり、それを支えるのは集団としての生徒の団結、そして生徒と教員の信頼関係です。充実した人間関係があつてこそ学校生活に対する意欲が高まり、それが学習にも波及していくと考えます」

集団づくりの基本は生徒指導だ。あいさつを大切にし、「レベル5」（人に会ったら自分から立ち止まり、頭を下げ、相手に伝わる声であいさつできる）を目指す「**挨拶強調週間**」を設定。レベル別に自己評価させるなど、マナーや規範意識の醸成に力を入れる。また、合唱指導を重視するのも、学級の一体感や集

団づくりに欠かせない取り組みと認識しているからだ。

「学校が荒れていた時代も、生徒は学校行事には意欲的でした。元々、行事に熱心に取り組む気質をもっていたのだと思います。校内での合唱活動が活発になると、協調性と集中力が育ち、それが学習面に向かえば大きな力になると信じていました。まさに合唱の力が、生徒の学習に向かう姿勢に大きな影響を与えたのだと確信しています」（小野先生）

落ち着いた雰囲気の中で学校生活が送れるよう、廊下には授業中にもモーツァルトの曲を流している。荒れとは無縁になった今も続けており、豊かな学習環境づくりに一役買っている。

生徒と教員の距離の近さも、集団づくりを支える重要な要素だ。教員は「いつも生徒と共に」を合言葉に、登校時や休み時間、昼休みも出来るだけ教室に行き、生徒と過ごすため、職員室で教員の姿を見かけることはほとんどないという。

朝は勤務時間の1時間程前に出勤する教員が多く、7時半過ぎには、職員室から学級に担任は向かう。担任が待っているため、生徒の登校も早く、8時には落ち着いた雰囲気で朝読書が始まる。授業では開始のチャイムが鳴る前に、教科担当が教室に入り、宿題の取り組み状況をチェックする。早めに授業を始めると、生徒はさっと学習に入る。宿題

広がる学力格差への多様な取り組み

☒ 「校長室通信 さくら前線」

今年度来られた先生方は、沖館中学校の先生に学びをされましたか。

☐沖館中学習システムの構築について
学習システムとは、一人一人のベクトルを同じ方向に向かわせて、学校として力を結ぶことを考えたものです。つまり、学力力の向上につながり、学校としての使命である**生徒の学力保障と成長保障**に直結するものと捉えています。
自己流・我流は、伸び悩む時が来る。教えるプロとして、学力保障は我々が全員で取り組まなければならない。組織として、生徒を育てなければならない。

昨年度、学校評価における生徒の評価で4と1の段階が①学習指導**94.5%**②生徒指導**96.3%**③特別活動**93.9%**④安全管理**95.4%**と学校生活全般において生徒の満足度が高かったことは、沖館中学校の教師集団の方が作用したものであり、学校力の向上がもたらした成果と言えます。どの分野も、どの教師も！**沖館中学校の学力向上への取組の強み**

年度	取組の重点事項	
23	<input type="checkbox"/> 課題を囲む	<input type="checkbox"/> 板書計画立案
24	<input type="checkbox"/> 課題を囲む	<input type="checkbox"/> 板書計画（ノート）
25	<input type="checkbox"/> 見直し・振り返り	<input type="checkbox"/> 4人のグループ
26	<input type="checkbox"/> 復習サイクル （形成的テスト）	<input type="checkbox"/> 復習できるノートづくり

※「学習課題」というカードを作成し、毎時間、黒板に掲げている先生がいます。生徒たちは「今日の授業で何をやるのか、分かりやすい」と言っていました。生徒にとって分かりやすいかどうかは、生徒から授業を評価してもらった方が一番手取り早いと思います。自己満足と生徒の理解度が違う場合があります。生徒の理解度を把握することには必要かと思えます。

沖館中
校長室通信
さくら前線
No. 3
26.6.17
文責：櫻庭

名義 **教えて**

名義 **ほめよ**

名義 **生徒指導訪問**

名義 **東青教育事務所長訪問**

最新の教育トピック、各行事のねらいなど、先生方が自身の教育観を振り返り、指導を見直せるような記事なども載せている
* 同校の資料をそのまま掲載

櫻庭校長が考える

学力二極化への対応

先生方をまとめる上で最も重視しているのは、「同僚性・協働性・一体感」です。学校としての指針があってこそ、教員のベクトルがそろい、指導も生徒たちに浸透していきます。校長の私が明確なビジョンを示し、そのビジョンの下で教員の気持ちが1つになるようなマネジメントを心掛けています。私のビジョンは「生徒の事実」から生まれます。生徒の課題は何か、我々の指導によってどう変わったのか。目の前にいる生徒の事実から、全ての指導が始まると考えます。

● 校長のリーダーシップ

教員向けの校長通信により 学校全体の一体感を高める

生徒の集団づくり、生徒と教員の信頼関係

と共により、同校では教員集団の一体感も大切にしている。教員の同僚性・協働性を醸成するために、櫻庭校長が月1回、教員向けに発行しているのが「**校長室通信 さくら前線**」だ

（☒）指導改善のヒント、行事の報告や学校の課題など多彩な記事の中に、教員へのねぎらいや励ましの言葉が散りばめられている。

「学校の取り組みも、振り返りがなければやりつ放しに終わってしまいます。管理職の視点で感じた成果、課題と方向性を明確に示すことで、先生方一人ひとりが自分の仕事を客観的に評価し、達成感や課題意識を育むことが大切です」（櫻庭校長）

や「一人勉強ノート」を提出していない生徒には、休み時間にも指導に当たる。

このように、生徒指導と学習指導をリンクさせることで、生徒と教員の距離が縮まり、教員の指導を素直に受け入れる素地が育まれている。それが、生徒一人ひとりの学習意欲につながり、学校全体にも落ち着きをもたらしている。

学力層に応じた指導、生徒指導と学習指導のリンク、小中連携の学習指導などによって、13年度の文部科学省「全国学力・学習状況調査」での同校の平均点は、全国平均を大きく上回った。今後の課題は、主体的に自分を主張できる積極性を身に付けさせることだ。現在、同校では各教科で「学び合い」を取り入れており、言語活動に関する指導力を高めて、学力向上につなげたい考えだ。

「言語活動を更に活発化させ、仲間と協働して答えを導き出したり、周りの意見を聞きながら自分の考えを持てるような生徒を育てたいと思います。そのための題材選びなど、指導力向上に向けて出来ることはまだまだあると考えています」（野口先生）